

原稿のテーマ「教区にとって私とは」を、今の教区を見てどういう感想を持つているのか、その問題点やこれから教区がどうあればよいかについての考えを述べよという意味にとらえ、愚見を書くことにした。

議長であった時期（一九九七年度・第六一総会期から二〇〇二年度・第六六総会期まで）の教区が直面していた状況が、さほど今と変わっているわけではないので、むしろ常に考えていかねばならないことを、反省の思いを込めながら書き綴りたい。

今の教区に何が必要であるか。それは「信頼関係」に尽きると言えるのではないか。いつの時代にも追求されねばならない大きな課題であろう。議長当時の財務部委員長であった田中義久さんが、教区総会で各教会負担金割り当て案を説明するとき、必ず言われた言葉を思い起こす。「教区は、諸教会の年度報

告をそのまま信じて計算をします。」双方が互いに認め合うことによって成り立ち、あるいは継続されるこの関係が、稀薄になりつづあるように思えてならない。

会計面だけの問題ではない。様々な働きについても、自分と異なる考え方や働きをする者があり方を認め、あるいは評価するということがなんと難しいことか。自分の働きへの熱心が神の座についてしまい、異なる意見を退けてしまうのである。

教會とは何か。何をするところか。また、何をするように神に招かれ、立てられているところかについても様々な考えがある。その時に、それぞれが自分と異なる考え方を認め合うことが私たちへタなのではないか、といい思ってしまう場面にしばしば直面してきた。伝統の違い、規模の違い、信仰理念や関心の違いを認め合うことの未成熟さがキリスト者にはあるのではないか。

教区は少数の意見をどのように大切に聞いているかという問題を考える。たとえば、総会や常置委員会のときに、議長は、議案を提案し、議場あるいは常置委員に議案を説明、また意見を聞いて答弁し、議案を修正してい

### 【巻頭シリーズ】

## 教区にとって私とは(10)

大津東教会 関雅人

# 京都教区ニュース

〒602-0917  
京都市上京区一条通  
室町西入ル  
TEL(075)451-3556  
FAX(075)451-0630  
E-mail  
info@uccj-kyoto.com  
ホームページ  
<http://www.uccj-kyoto.com/>  
発行代表者  
井上一雄  
編集責任者  
韓守信

くという大きな働きを担わされている。その上に司会進行役という役目がある。それを補佐するために副議長がいるものの、多くの場面で議長が中心であり、限られた時間を気にしながら多くの議案を処理し決していくということは、結構大変なことであった。そのようななかで、議長が多くの異なった意見をどのように理解し、同時に少數の立場の意見を大切に聞き、そして決議に盛り込んでいくか。至難のわざと言つてもいい。「大きな声」を全体の声にしてしまう。その結果、反対意見を封じてしまうことになつてしまふ。それは、教区が偏つていているという不信感につながつていくのではないか。その解決のために、総会議事運営委員会の設置も一案であろう。要は、どのように小さい声を聞きうるかといふことが、教区全体の信頼の構築のために必要なことだ。

会計の面でも同様ではないか。高齢化と経済的低下の傾向は、教区にとって、今後ますます顕著になつていくであろう。そのことを思う時、自分のところが得をするような考え方でことを処理していくのでは、信頼関係の構築は望むべくもない。もとより、小さい教区にしていくかを考える必要がある。パイの大ささをそのままにして配分方法を考える——各教会負担金割り当て案の検討一手法は、おのずから限界がある。しかし、自分も参画している教区の働きに対しても負担金であると考えるとき、その負担感は大きく異なるてくるのではないか。そのように思う。

## 【報告】

## 一一〇一 年度第一回

## 教区改革協議会とその後

教区改革特設委員会委員長  
京都教会 入治彦

第1回教区改革協議会が、昨年の十一月三十日に洛南教会で開催された（出席・二二教會三〇名）。初めに、横田明典委員の進行でプログラムの説明がなされ、委員長の入治彦が協議会に至る経緯について報告した。

## 1. これまでの経緯

京都教区は、教区内諸教会、伝道所の教勢の暫時減少と財政力の低下という厳しい状況にあり、教区改革の準備委員会、検討委員会を設置して分析して来た。しかし、教区が諸教会に関わり、教会再建をするには限界があり、構造、組織、財務と全般的にわたる改革をしていくには、歳月がかかるという共通認識に至つた。その現状を踏まえて、教区負担金、宣教連帶という二点に絞って検討し、今回教区改革特設委員会としては、教区負担金の新算出方法と宣教連帶デナリオン献金・教職互助献金・教会互助新制度の具体的な改革案を説明し協議したい。

2. 教区負担金の新算出方法の改革案
    - ① デナリオン献金：現状の方法を向こう五年間続ける（二〇一六年三月末まで）。
    - ② 教職互助献金：教会担任教師による互いの評価されるべきものであるが、定額教会が多いことによって、他教区と比べて、京都教区は、教区内諸教会、伝道所の教勢の暫時減少と財政力の低下という厳しい状況にあり、教区改革の準備委員会、検討委員会を設置して分析して来た。しかし、教区が諸教会に関わり、教会再建をするには限界があり、構造、組織、財務と全般的にわたる改革をしていくには、歳月がかかるという共通認識に至つた。その現状を踏まえて、教区負担金、宣教連帶という二点に絞って検討し、今回教区改革特設委員会としては、教区負担金の新算出方法と宣教連帶デナリオン献金・教職互助献金・教会互助新制度の具体的な改革案を説明し協議したい。
- 志賀勉委員からは、委員会で検討した右記改革案について以下の説明があった。改革のポイントとして、教区負担金と宣教連帶とが連動するような教会互助体制をつくる。教区負担金は公平性を確保する。新たな教会互助を実施するという三点を軸にし、改革案を提案する。
- ① デナリオン献金：現状の方法を向こう五年間続ける（二〇一六年三月末まで）。
  - ② 教職互助献金：教会担任教師による互いの評価されるべきものであるが、定額教会が多いことによって、他教区と比べて、京都教区は、教区内諸教会、伝道所の教勢の暫時減少と財政力の低下という厳しい状況にあり、教区改革の準備委員会、検討委員会を設置して分析して来た。しかし、教区が諸教会に関わり、教会再建をするには限界があり、構造、組織、財務と全般的にわたる改革をしていくには、歳月がかかるという共通認識に至つた。その現状を踏まえて、教区負担金、宣教連帶という二点に絞って検討し、今回教区改革特設委員会としては、教区負担金の新算出方法と宣教連帶デナリオン献金・教職互助献金・教会互助新制度の具体的な改革案を説明し協議したい。

2. 教区負担金の新算出方法の改革案
    - ① デナリオン献金：現状の方法を向こう五年間続ける（二〇一六年三月末まで）。
    - ② 教職互助献金：教会担任教師による互いの評価されるべきものであるが、定額教会が多いことによって、他教区と比べて、京都教区は、教区内諸教会、伝道所の教勢の暫時減少と財政力の低下という厳しい状況にあり、教区改革の準備委員会、検討委員会を設置して分析して来た。しかし、教区が諸教会に関わり、教会再建をするには限界があり、構造、組織、財務と全般的にわたる改革をしていくには、歳月がかかるという共通認識に至つた。その現状を踏まえて、教区負担金、宣教連帶という二点に絞って検討し、今回教区改革特設委員会としては、教区負担金の新算出方法と宣教連帶デナリオン献金・教職互助献金・教会互助新制度の具体的な改革案を説明し協議したい。
- 志賀勉委員からは、委員会で検討した右記改革案について以下の説明があった。改革のポイントとして、教区負担金と宣教連帶とが連動するような教会互助体制をつくる。教区負担金は公平性を確保する。新たな教会互助を実施するという三点を軸にし、改革案を提案する。
- ① デナリオン献金：現状の方法を向こう五年間続ける（二〇一六年三月末まで）。
  - ② 教職互助献金：教会担任教師による互いの評価されるべきものであるが、定額教会が多いことによって、他教区と比べて、京都教区は、教区内諸教会、伝道所の教勢の暫時減少と財政力の低下という厳しい状況にあり、教区改革の準備委員会、検討委員会を設置して分析して来た。しかし、教区が諸教会に関わり、教会再建をするには限界があり、構造、組織、財務と全般的にわたる改革をしていくには、歳月がかかるという共通認識に至つた。その現状を踏まえて、教区負担金、宣教連帶という二点に絞って検討し、今回教区改革特設委員会としては、教区負担金の新算出方法と宣教連帶デナリオン献金・教職互助献金・教会互助新制度の具体的な改革案を説明し協議したい。

2. 教区負担金の新算出方法の改革案
    - ① デナリオン献金：現状の方法を向こう五年間続ける（二〇一六年三月末まで）。
    - ② 教職互助献金：教会担任教師による互いの評価されるべきものであるが、定額教会が多いことによって、他教区と比べて、京都教区は、教区内諸教会、伝道所の教勢の暫時減少と財政力の低下という厳しい状況にあり、教区改革の準備委員会、検討委員会を設置して分析して来た。しかし、教区が諸教会に関わり、教会再建をするには限界があり、構造、組織、財務と全般的にわたる改革をしていくには、歳月がかかるという共通認識に至つた。その現状を踏まえて、教区負担金、宣教連帶という二点に絞って検討し、今回教区改革特設委員会としては、教区負担金の新算出方法と宣教連帶デナリオン献金・教職互助献金・教会互助新制度の具体的な改革案を説明し協議したい。
- 志賀勉委員からは、委員会で検討した右記改革案について以下の説明があった。改革のポイントとして、教区負担金と宣教連帶とが連動するような教会互助体制をつくる。教区負担金は公平性を確保する。新たな教会互助を実施するという三点を軸にし、改革案を提案する。
- ① デナリオン献金：現状の方法を向こう五年間続ける（二〇一六年三月末まで）。
  - ② 教職互助献金：教会担任教師による互いの評価されるべきものであるが、定額教会が多いことによって、他教区と比べて、京都教区は、教区内諸教会、伝道所の教勢の暫時減少と財政力の低下という厳しい状況にあり、教区改革の準備委員会、検討委員会を設置して分析して来た。しかし、教区が諸教会に関わり、教会再建をするには限界があり、構造、組織、財務と全般的にわたる改革をしていくには、歳月がかかるという共通認識に至つた。その現状を踏まえて、教区負担金、宣教連帶という二点に絞って検討し、今回教区改革特設委員会としては、教区負担金の新算出方法と宣教連帶デナリオン献金・教職互助献金・教会互助新制度の具体的な改革案を説明し協議したい。

しまうのではないか？→改革検討準備、改革検討、改革と五～六年にかけて長く協議をしてきたことをご理解いただきたい。教区改革を検討し始めるとき、宣教論、教区機構、教勢、財政の面で、あまりに問題が多岐に渡っていた。経済的な面だけではないことは承知しているが、委員会のなかでの共通認識が得られ、この財政面という切り口から、それぞれの教会の宣教論や様々な発展的議論をすべきと考える。

③大規模教会で切り捨てられた人が小規模教会に来ている。その人がさらに改革によって切り捨てられることになることをどう思うのか。特に教区ニュースで報告された内容は「弱者」切捨てではないか？→教区ニュースの原稿は委員会（宣教連帯・教会互助の新制度提案グループ）の途中経過や個人の思いを掲載してしまった。今回配布されている案が最終的な提案と受け止めさせていただきたい。

④今回の改革案を見て、教区はどの方向性をもっているのか。財政的に厳しいから小規模教会を整理しようとしているのか、教区の連帯を重視し小規模教会を支えようとしているのか？→委員会としては後者の方向性を目指している。ただ、教区の各個教会主義をどう乗り越えていくかが大きな課題となる。

⑤教職互助について。教師の自己申告制度と年収の1%の拠出というのは、自由意志なのか強制なのか？→強制とす

る場合、教師の範囲をどうするのか、付帯施設からの収入をどう計算するか等の課題があり、難しい。案として未参加の教師を訪問するなどして参加の枠を広げたい。

⑥大規模教会からの拠出金について、自主的な献金とするなら、机上の計算通りのお金の動きが予想通りにはいかない状況があるのではないか？→そのことは了解している。

⑦拠出金について。大規模教会が小規模教会を指定して献金する方法、拠出金をブルーして配分する方法、大規模教会にある程度の義務を課す方法などを考へるが、どうなのか？→現在はブルー制を考えている。

⑧宣教研究委員会、シンクタンクなど魅力ある教会作りを呼びかけるというのはどうか？→最初の教区改革検討準備委員会で、それらの提案も出ている。

⑨一人当たり千円というが、小規模教会の信徒の収入の少なさ、不安定さを一律大規模教会と同じにして欲しくない。

↓一人当たりをやめ、収入と支出だけで小規模教会の負担が軽減できるのでを考え、収入の基礎控除を増やすことで小規模教会の負担が軽減できるのではないか。ただし、「答え有りき」の算定基準を考えて良いのかわからないが。

⑩他教区との比較のなかで、どこに公平性を見出したのか？→大都市（東京教区）は、一人当たりの定額、支出の定率。地方教会では細部に配慮が見られる。京都教区は比較すると良くできている。しかし「定額教会」の負担額が

極端に低いので、今回の提案となつている。

⑪小規模教会を切り捨てるこしない、約束して欲しい。→極力努力する。「各個教会主義」を尊重しつつ、さらに「連帯」することが教区改革の柱である。

⑫協議会を年度内にもう一度開くことを要望。→この後の委員会で検討する。

⑬教職互助献金は、参加率の向上を考える方法を模索して欲しい。→現在、参加していない教職への訪問を考えている。

⑭支出控除額に教職互助献金も含むと意識が変わるのでないか。→参考にする。

⑮大規模、小規模と話題になつているが、中規模教会もある。表現の仕方は慎重に。→教区よつては中規模教会に優しい教区もあり、その姿勢が負担金算定基準にもあらわれているようだ。そのような教区の姿勢を含めての意見もある。

⑯意見を言いにくい場合もあるので教会名を伏せてアンケートを行つてはどうか。→意見を言いにくい場合もあるので教会名を伏せてアンケートを行つてはどうか。

⑰小規模教会については減免申請を受け付けて、常置委員会に裁量を持たせてはどうか？→参考にさせていただく。

⑲デナリオンや教職互助献金の分担化という案があつたが、分担化するとかえて反発があるのでないか？→一方で支出があり、その額を満たす必要性もあるため、委員会では今のところ分担金化と

いう意見がある。これも具体的な意見として聞きたい。

### 5. その後

当特設委員会では、協議会で出された意見を受け、負担金については、減額申請も常置委員会が窓口になつて受け、検討するような柔軟性をもたせることが考へている。第2回の教区改革協議会を二〇一二年二月五日(日)に大津教会で開催し、再度、意見を聞き、次期定期総会に改革の提案をしていきたい。

### 東日本大震災ボランティア活動報告会

災害対策小委員会ボランティア事務局・

同志社教会

望月修治

二〇一一年三月十一日に東日本を襲つた大震災から一週間ほど経つた三月半ば、同志社大学神学部の院生が被災地に入り、支援の道の模索を始めて下さいました。京都教区は、この学生の皆さんとのボランティア活動を受けとめ、教区のボランティア派遣活動として継続的な支援体制を組むこととし、五月から十月末までを第1期として、ボランティア登録・派遣への参加を呼びかけました。第1期のボランティア登録者は三六名、のべ派遣者数は六四名です。このボランティア活動の報告会を二〇一一年十一月二十日に洛南教会で行いました。五〇名近い出席者がありました。まず、仙台・石巻でのボランティア活動への着手の経過とその後の展開について、渡辺真一さんから報告をしていただきました。三月十八日に被災地に行き、何ができるか、支援の拠点を見定

めることからはじめ、物資の支援とボランティアの受け入れの呼びかけをしていった経過を聞きました。

### 「被災者」と「復興」のあいだで —今後の京都教区による

#### 被災者支援に向けて

同志社教会 加藤良太

川江友二さん、岡本晃典さん、井内亜弥さん、福山裕紀子さんから、被災地で行つたボランティア活動、そして被災された方との出会いとそこで被災体験を聞き巡つた思いを語りました。続いて高濱心吾さんから、九月二十五日に仙台市七郷篠屋敷で、京都教区が東北教区被災者支援センター・エマオと協力して開催した「交流感謝祭」の報告を聞きました。ソフトボール大会、食べ物の出店、落語、花火などのプログラムが組まれました。七郷篠屋敷地区から二〇〇名余の皆さんが来て下さつて、震災以来の再会を喜ぶ方々の話しも尽きなかつた感謝祭となつたとのことです。

この報告会には被災地の仙台市若林区七郷篠屋敷から菅原忠夫さん、被災者施支援センター・エマオから川上侑(たすく)さんにも来ていただき、「被災地の今日まで、今、そしてこれから」を語つていただきました。菅原さんは、七郷篠屋敷地区で被災された皆さんのお所在を確認し、尋ね、離れて暮らす地区の人たちの絆をつなぐ活動をしてこられました。菅原さんはボランティアの人たちとずっと関わるとも語つて下さいました。

被災地では、ボランティアの人数が減少しております。とりわけ私たちの身近には、京滋の要請が届いています。今後も、ボランティアとして被災地の支援活動に少しでも多くの方が加わつて下さることが願われています。京都教区は第2期ボランティア派遣活動(二〇一二年三月末まで)を行つています。

この記事が出るのは、震災から十ヶ月過ぎ、1年を迎える頃でしょうか。被災地の災害ボランティアセンターの看板が「被災者支援」から「復興支援」に掛け変わったとの報が聞こえてくるようになり、「現場」の両方を体験したるものとして、被災者支援の今後について思うことを、いくつか記してみます。

この記事が出るのは、震災から十ヶ月過ぎ、1年を迎える頃でしょうか。被災地の災害ボランティアセンターの看板が「被災者支援」から「復興支援」に掛け変わったとの報が聞こえてくるようになり、「現場」の両方を体験したものとして、被災者支援の今後について思うことを、いくつか記してみます。

この記事が出るのは、震災から十ヶ月が過ぎ、1年を迎える頃でしょうか。被災地の災害ボランティアセンターの看板が「被災者支援」から「復興支援」に掛け変わったとの報が聞こえてくるようになります。一方で、私たちは被災地で復興から取り残された人たち、原発災害で新たに生み出される被災者の存在を知っています。とりわけ私たちの身近には、京滋の府県による福島支援の経緯から、福島から避難した多くの被災者が暮らしています。被災教区である東北教区・奥羽教区は、多くの支援団体が「復興」に舵を切るなか、これからも「被災者」に寄り添う支援を続けられるそ

うです。それを支える京都教区も、支援の姿勢を忘れないで欲しいと思います。

一方で、被災者に寄り添う支援の「あり方」には課題もあります。震災当初、支援に携わる教会関係者の間に「成果重視の他の支援団体との差別化」をうたい、教会による被災者の心身の状況に寄り添った支援の優位をことさら強調する空気がありました。確かに、一部の支援団体が「成果」を焦って問題を起こす例もありました。しかし、そうした教会関係者の意識の片隅に、支援の「成果」を誇る他団体と同じく、人助けの「美談」を欲しがる欲張りな部分を感じたのは、私だけでしょうか。実際、被災者に寄り添う支援の現場がどれほど苦しく、美談から程遠いものかは、実際にボランティアを体験された方や、体験者の報告に触れた方ならよく理解されているかと思います。

被災者に寄り添う支援は、明るく希望に満ち、最後に必ず「美談」が待っているものとは限りません。時の経過とともに、その時その時の被災者の痛みと関わり合つていかねばならない、辛い活動かもしれません。それでも、その現実に「立ちすくん」で「変化に後向きになるのではなく、その時その人のニーズを深掘りした支援内容に常にチャレンジし、時には「復興」を目指す他の支援団体とも賢く連携しながら、結果的に被災者が何らかの歩みを進める一助となる、そんな支援のありようが、これから長く続く東北の人々と土地との関わりのなかで、私たち京都教区に求められているのではないでしょうか。

**障がい者問題特設委員会**  
**「邑久光明園訪問」の報告**

——ハンセン病のこれまでと、今と、これからについて思うこと

近江平安教会 島田 健一郎

昨年の十月十日（月）、岡山県にある邑久光明園に行きました。邑久光明園は、瀬戸内海の長島にあります。美しい瀬戸内海にポンと浮かんだ島に、頑丈そうな橋がかかっていて、それを渡つて、車すぐの場所に光明園はありました。

園の敷地内に入り、さらに車で少し行くと、同じような建物が連なつている場所がありました。そこに入園されているとのことでした。今回の国立療養所現地訪問では、特別になかに入させていただき、入園されている方から話を伺うことができました。

部屋のなかにあがらせていただくと、病気の影響で目が見えなくなつていらっしゃるとのことでしたが、そうは思えないほどテキパキと、お茶やお菓子まで私達のために準備していただきました。今回の訪問に来た私達が部屋に集まるのを待つて、実に柔軟な表情で、ださいました。

実際に、話を始めていただくと、こんなに優しい笑顔ができる方にさまざま苦難や悲しい出来事が起こつていった過去があることに気づかれて、果然としました。入所すぐに入園する人が一番最初に入れられたトロッコ道、園のルールを守れない人間が入れられる監禁室、強制的に堕胎された胎児の葬られた納骨堂、教会にハンセン病患者とそうでない人の入り口が別々にあること、入園する人が一番最初に入れられる消毒液でみたされていた狭い風呂の跡。過去の痕跡から、そこに潜む様々な思惑の話まで、わかり

生きる意志をも失つてしまいそうな時期の話。自分達の仲間が、タクシーに乗車拒否された話、園内の制約だらけの生活ぶりなど、話すのもつらいのではないかと思うような話を、実際にたんたんと話してくださいました。

病気からくる肉体的な苦しみ、法律的・物理的な隔離、人権侵害、偏見による精神的な苦しみ、様々に苛まれた過去の話ばかりではなく、今の生活の話をされる時は、本当に楽しそうな笑顔で話をされ、なんか、こちらまで楽しくなるのが不思議でした。いま育てている花の話。同病の方と、やっていらっしゃる詩作の話など、本当に何気ない日々を生き生きと生きていらっしゃるのが本当によくわかりました。この訪問で、私が感じたのが、「過去の凄惨さ」と「今を生きることの逞しさ」のギャップが「ビンと来ない」という気持ちでした。

今回の訪問に際して、瀬戸内ハンセン病人間回復裁判を支える会の難波さんが、全面的にサポートしてくださいました。難波さんは限られた時間のなか、本当に丁寧に、この島とその周りで起つていたたくさんの悲しい出来事、事件、法律も含めた環境についてフィールドワークのなかで話をしてくださいました。

船からの積荷を搬入するため急坂につくられたトロッコ道、園のルールを守れない人間が入れられる監禁室、強制的に堕胎された胎児の葬られた納骨堂、教会にハンセン病患者とそうでない人の入り口が別々にあること、入園する人が一番最初に入れられる消毒液でみたされていた狭い風呂の跡。過去の痕跡から、そこに潜む様々な思惑の話まで、わかり

やすく教えていただきました。その話を聞いていて、先ほどの「ピンと来ない」感じの原因がわかつたような気がしました。ここから、少し私の推測の話もはいりました。ですが、「ご容赦ください。難波さんの話から私が感じたのは、人間を差別する」時の人間の「グロテスク」さです。それは、場合によつては意図的に、またほとんどの場合は無意識的にその流れを生んで、承認してしまうことから生まれるのではなかいかと考えます。

悪い状況を許す法律を特定の人間が発案したとして、それを推進するのは、無関心な普通の人。その法律を通した政治家なり党に対して、何も知らず興味をもたずに投票したのも普通の人。ハンセン病患者に対しても、しない疑いを掛けて差別するタクシー運転手も、たぶん居酒屋で隣にすれば、その辺の普通のオッチャンかも知れない。何も知らうとしなければ、そんなオッチャンに自分もなつているかもしれない。自分以外の被害にあつている少數の方々に対する無関心さが、何を起こしてしまつたのかに興味がないことが本当に恐ろしいことだと私は感じました。

入園されている方の「朗らかさ」や「無垢さ」、「逞しさ」は、一方でそんな厳しい環境、病気のなかでも「生きる」ことに意味を見つけて絶望しなかつたご自身の「強さ」であることはもちろんそうであると思ひます。

もう一方で、そんな無関心で残酷な「人間」を散々みせつけられて、それでも人間に絶望しないで「生きていくれている」方に對して、私が抱く感動的な気持ちが、僕達の鈍感な感

受性を刺激した結果でもあるのではないかとも感じました。

ハンセン病は、科学の進歩に伴い、幸いになりました。これから、少し私の推測の話もはいりますが、「ご容赦ください。

難波さんの話から私が感じたのは、人間を差別する」時の人間の「グロテスク」さです。それは、場合によつては意図的に、またほとんどの場合は無意識的にその流れを生んで、承認してしまうことから生まれるのではなかいかと考えます。

悪い状況を許す法律を特定の人間が発案したとして、それを推進するのは、無関心な普通の人。その法律を通した政治家なり党に対して、何も知らず興味をもたずに投票したのも普通の人。ハンセン病患者に対しても、しない疑いを掛けて差別するタクシー運転手も、たぶん居酒屋で隣にすれば、その辺の普通のオッチャンかも知れない。何も知らうとしなければ、そんなオッチャンに自分もなつているかもしれない。自分以外の被害にあつている少數の方々に対する無関心さが、何を起こしてしまつたのかに興味がないことが本当に恐ろしいことだと私は感じました。

### 課題とこれからの歩み③ 【連載コラム】

#### 不登校・ひきこもりの青少年や家族と共に歩む特設委員会

二〇一一年七月に内閣府から出された『ひきこもり支援者読本』(内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室)の「発行にあたつて」には、「平成二十二年二月に内閣府が行つた調査結果から、全国のひきこもりの子ども・若者は約七〇万人に上ること、三十歳代で長期にわたつてひきこもつてゐるケースが数多く見られることなど、遷延化するひきこもりの実態が明らかになりました」と記されてい

る。しかしひきこもりについての統計は、いくつかあり、一六〇万人以上、稀に外出する準ひきこもりも含めると三〇〇万人以上といふ報告もある(NHK福祉ネットワーク)。子どもたちのひきこもりは不登校と深く関わりがあり、不登校から大人のひきこもりへと移行していく人は多くいるが、子どもの時に不登校を経験せずに大人になってからひきこもる人もいる。ひきこもりとは何か、その定義はさまざまである。行動範囲が自分の部屋だけという人もいれば、自分の家のなかだけ、という人もいる。夜間のみ外出できるという人や、時々アルバイトに行く人もいる。従つてひきこもりの実態はさまざまであり、ひきこもりの定義はこれだ、ということは一概には言えない。ひきこもりとは、本人が自分のことをひきこもりと定義した時に、その人はひきこもりであると言うことができる。

ひきこもりの原因もさまざまであり、いじめを受けた経験がもとになつて不登校からひきこもりに移行する場合や精神疾患を抱えている場合など、原因がはつきりすることもあるが、本人にも周囲の人々にも原因がよくわからない場合もある。

ひきこもりの問題に関わつておられる精神科医の高岡健さんは、「十年、二十年と引きこもる人には、そうするだけの必然性があるのです。彼らはその期間のなかにも価値を持つが、だからしておられるのであって、そもそも無為なことはありません」と語る。親たちや周囲の人々にできることは、まずはひきこもりの人々が安心して生きていられる居場所を確保することであり、ひきこもりの人々が好きなことをしながら自分との対話を深めることが大切

であると言われる。

最近では、ひきこもりの人々の年齢が上が  
り、これまで支えてきた親たちも高齢化して  
いることは問題となっている。親たちも含め  
てのサポートが求められるところであり、教  
会でもどのようなサポートができるか、考  
えてみてはどうか。

追悼・加邊永吉牧師

大津東教会  
関せき  
雅まさ  
人と

癌のために八歳で死去された。前夜式は、三日（土）に近江八幡の自宅で行われた。葬儀は、四日（日）の正午から加邊牧師が「わたしの第二の母教会」といつて愛しておられた大津東教会で行われた。

四日の礼拝は、葬儀にすぐ移行できるように、礼拝堂の中心に安置した柩を囲むようにして行つたが、牧師の地上の終わりの日の式典として最善ではなかつたか。また教員にとっても、敬愛していた先生と最後の礼拝とともにでき、印象深いことであつたと思う。

加邊永吉牧師は、一九三〇年五月六日、群馬県吾妻町で誕生、十八歳の時に渋川教会で受洗された。同志社大学大学院修士課程を一九五六年に修了され、それと同時に山田美智子さんと結婚された。愛媛県の久万教会に赴任のための旅行が新婚旅行であつた。同教会で二年半、ついで兵庫教会で九年余り、明石教会で二八年間伝道牧会に励まれたあと、一

瀬田に移住して最初の仕事は、友人から進  
められた大津東教会を探すことであつた。以  
来、怪我や癌の治療で入院された時、また癌  
が進行して歩行が困難になつた末期以外は礼  
拝を欠席されることではなく、わたしの稚拙な  
宣教（説教）を丁寧に聞いておられた。また  
教会のいろいろな行事に欠かさず参加される  
そのような先生のあり方は教会員の厚い信頼  
を受けた。しかも、牧師の私を立てる姿勢を  
崩されないので、余計に信頼を集めたのでは  
なかろうか。最初に書いたように「第二の母  
教会」という言は、その教会生活の有り様で  
実証されたようと思う。

先生をそのように生かしたものは何か考  
える。その誠実さは、神への誠実という原点  
に発するものであり、それが生涯を貫く通奏  
低音となつていつたのであろう。

写真が趣味で、教会の行事の時には三コン

A black and white portrait of a man with glasses and a hat, smiling.

。 えれば止揚学園の子どもたちとの交わり) ことは、他人からどうのようと言われようと曲げない。その誠実は、先生の長い信仰生活によって培わ

奥村直彦牧師を偲んで

安土教会  
伊澤さわ

記念礼拝に引き続き行われた就任披露の席で、突然、まさに突然、江川役員から私に声がかけられ、心の準備をする暇もなく、マイクを持つことになりました。あとは、出席された諸先生方のユーモアに富んだ祝辞やら、奥村先生について初めてお開きすることやらを、交えながらのお祝いの言葉をお開きました。りしているうちに、時間が過ぎて行きました。その奥村先生が天に召されたのは、去年の十一月二十九日の朝のことでした。八年四ヶ月、いま思い起こしますと安土教会での八年四ヶ月は、あつという間のことでありました。奥村先生の説教は、連講が基本でした。使

その日は、暑い夏の日でした。奥村直彦先生の安土教会牧師就任を祝うべくして、京都・滋賀のほか、畿内からお集まりいたいた先生方の団扇を使う音が、いまも耳に残っています。

記念礼拝に引き続ぎ行われた就任披露の席で、突然、まさに突然、江川役員から私に声がかけられ、心の準備をする暇もなく、マイクを持つことになりました。あとは、出席された諸先生方のユーモアに富んだ祝辞やら、奥村先生について初めてお開きすることやらを、交えながらのお祝いの言葉をお開きました。その奥村先生が天に召されたのは、去年の十一月二十九日の朝のことでした。八年四ヶ月、いま思い起こしますと安土教会での八年四ヶ月は、あつという間のことでありました。

奥村先生の説教は、連講が基本でした。使



徒言行録から始まり、次に四福音書をテキストとした説教でありました。説教のなかで先生は、聖書が歴史的事実の記述であり、単なる思想や哲学とは異なることを強調しておられました。そして、その話の進め方は私たち信徒に対しては、地理的な説明もされ、例えば、現在のイラクが当時のペルシャであつたとか、ローマ帝国の繁栄と滅亡、現在に於ける諸国とキリスト教の関わり、安土町へのカソリック教の伝播などにも言及されていました。私たちは聖書の巻末にあるパウロの伝道旅行の足跡に興味を持ち、また、パウロを通して、初期キリスト教のなかでの各信徒の働きを学び、日常生活に生かそうと思ったことは、二度や三度のことではありませんでした。

ある寒い冬の聖日の朝のことでした。その日は、前夜からの雪が積もっていました。私の家は教会とは比較的に近かつたので、早めに行つて礼拝の準備をしようとして、教会に着きました。すると、先生がゴム長を履いて、スコップで雪かきをしておられるではありませんか。先生は私よりもお年を召しておられ、おまけに、私から見れば華奢な体つきの方です。その先生が一所懸命スコップをふるつて、門から玄関への雪を掻いておられました。私は先生が常々言つておられた「イエス様は何をすべきか、について常に省みなければなりません」と。

### 美藤 章教師を偲んで

近江八幡教会 北川 博司

近江八幡教会主任担任教師の美藤章牧師が二〇一一年クリスマス・イブの早朝四時に天に召されました。

美藤先生は一九四〇年一月、愛媛県の瀬戸内海に浮かぶ岡村島に生まれ、島で初めてのクリスチヤンである継母の影響で十六歳の春に受洗し、同志社大学神学部を卒業され、大学院を修了後、靈南坂教会に赴任されました。在任中にお連れ合いの基子さんと出会い、ご結婚、義兄が同教会の副牧師であったことから、中目黒教会に転任され、以後、大阪大道教会、郷里の今治教会、そして近江八幡教会と五つの教会で伝道され、四十六年間にわたり牧会生活を全うされたのです。前任者の急な辞任により、後任に求められた牧師像は「牧師のなかの牧師」であり、加

私は、思わず先生からスコップをとり、「先生、なかに入つてください」と言つていきました。先生はまた、「バランス感覚」を大事にしておられました。そして、キリスト者がまず大事にすることは、「信仰」であると、そして、キリストについての「伝道」から手を抜いては駄目だと。しかし、世にあってのキリスト者であるから、「バランス感覚」を身につけて日々の生活を歩むことが重要である、と導いておられました。今、私たちは、先生の主張と行動から、キリスト者として、ゆっくり歩いておられます。歩んでいきたいと思います。



先生は一匹狼で

概のある伝道者であるイメージの反面、その

根底にはいつも穏やかな心配りがされていました。似た者夫婦とはよく言つたものです。先生の説教は聴衆を捉え、至福の時を与えてくださいました。昔ながらの職人肌で、真似ることは拒まず、一度たりとも叱ることのない、信念と祈りの主の僕で、すべてはその生き様で示されたように思います。昨年三月の役員会で今年度末での隠退を表明され、四月の定期総会前に胃癌が判明、手術を受け、懸命に闘病されました。最初の手術で余命は月単位と宣告され、十一月末に再発、転移が判明しながらも、任期を全うするため、再手術を決断されました。

「主イエス・キリストは不変であり、私たちがその主の招きと導きに従い応えて進むかぎり、教会は変化する時代の潮流に適応しながらも、根本において永遠不滅である。」『近

えて教会創立百周年記念事業を執り行うことでした。二〇〇〇年四月に着任され、以後、十一年余り、教会のために御奉仕くださいました。先生は外見は丸刈りで非常に強面の印象を受けますが、非常に温和で、お連れ合の二人三脚での牧会は絶妙でした。夫婦共々大の阪神ファン。会堂の説教壇から本格的な講解説教を投げかけられる先生と会衆席ではありますが、歩んでいきたいと思います。

最後方の出入口に最も近い席に座られ、教会員に目配り、気配りをされるお連れ合いとは、まさに黄金のバッテリーでした。

江八幡教会百年史』はこの一文で結ばれています。どんなことがあらうとも、主にあって決して搖らぐことがない。美藤牧師は主の僕としての誇りを抱きつつ、在任のまま主の御許に凱旋されました。あまりにも潔いその生き様は、改めて牧師とはこのようにあるべきだと、身をもつてお証しされたたように感じています。

## 【教会・伝道所からの声】(9)

## 五十歳の洗礼

丹後宮津教会 小 谷 芳 弘  
五十歳で洗礼を受けたから、三年が過ぎました。私は、若い時から仏教には興味があり、ある宗派に入信し活動をしておりました。人間のなかには仮性があつて磨けば必ず光るといふ教えには希望がありました。それに比べ、人間は罪人であつてイエス・キリストを通してしか救われないというキリスト教はある種、責任放棄のように私の眼には映りました。また、イエス・キリストは罪なき神の子ではあつても、罪ある私は神の子にはなれません。磨けば仮になれると説く仏教と、磨いても神の子にはなれないキリスト教。この差は私にとって歴然でした。

そんな状態がずっと続きましたが、四十歳前半の頃でしようか、ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』を読む機会を得ました。長編なので完読出来るか不安でしたが、母親が本嫌いの私のために幼少のころ買っておいた世界文学全集のなかにこの本があつ



たので、母親の気持ちを汲み取る意味もあり、読み始めました。キリスト教の匂いのする作品なので、渋々読み始めましたが、読み進む内に主人公ジヤンバルジヤンの生き方に深く傾倒していきました。「ひよつとしたらキリスト教も捨てたものじやないかも」と感じ、それ以後、キリスト教関連の小説を中心に読むようになり、ついに「聖書も読んでみよう」と決意し、一年半かけて通読するまでになりました。

丹波の先達たち  
丹波新生教会 今 井 富佐三

ある日、イエスが十字架に掛けられる箇所を読んでいました。大衆はイエスを「十字架に掛けろ」と叫びます。二〇〇〇年後の今だからこそ、この言葉がいかに残酷であり、いかに罪深い言葉であるかが分かりますが、二〇〇〇年前、もし私がその場に居合わせたら、ゴルゴタの丘に向かうイエスに何と声をかけたであろう、と想像しました。そこには、「このいつを十字架に掛けろ」、「もしお前が神の子ならその十字架から降りてみろ、そうすればお前に信じてやる」と叫ぶ私がいました。私が?...愕然としました。

二〇〇〇年前の外国で起こった、私には全く関係のない話であります。愕然とする必要など何もないのです。しかし、無関心ではいられない何かがありました。自分の心に決着をつけずにそのままでした。そう、私は見えなかつたのです、そして、私がイエスを十字架に掛けたのです。しかも、私が十字架刑にしたイエスが、死にかけのイエスが、私のために祈っていました、「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」と。イエスとは、文句を言つたり、私の好みに

合うかどうかを吟味したりする対象ではなかつたのです。ただただひざまずく相手だつたのです。次の日曜日、私は教会の門を叩いていました。五十年も経つていました。

丹波にはまだ鉄道が通じていなかつた一八七三年、丹波町（現、京丹波町）にあつた切支丹禁制の高札が撤去され、國中が文明開化の気運に目を向ける時代となり、同志社の生徒である堀金太郎（貞一）が亀岡でひとり伝道を行なう。村上太五平、滝川忠一が西京第三公会（現平安教会）で受洗し、一八八四年に丹波教会が創立した。丹波一円に信徒が生まれた。戸主が入信すれば連れ合いや家族が入信するので、信徒は二〇〇名を超えていた。綾部方面からの信徒は、園部の礼拝に出席するため徒步で三日がかりでやつて来て、信徒宅に泊まり、月曜日の朝に満たされて帰るということで、福知山、綾部の信徒の八十名のために丹波第二教会（現、綾部教会）を設立している。

一八八四年の教会創立の時、受洗した三十名のなかに野林格蔵がいた。彼はハンセン病を患い、差別と偏見のなか両親には早く死に別れ一人息子萬蔵とは生き別れ、妻には見捨てられた。しかし、母すみから「今後どんな難儀があつても信仰を落とすな」との遺言により、熱烈な信仰を貫き天に召された。当時、第三代松井文彌牧師による基督新聞社の信仰

